

インド留学記 その3

インドの学校事情

東方研究会専任研究員
立正大学 講師 高橋 堯 英

なにげなしに、眼をとめたカレンダーの日付。
十月十五日。ふと、「デリー大の二学期の始まる日」であることを思い出しました。

デリー大学では、前期と後期からなるセメスター制ではなく、三学期制が行われています。乾燥と灼熱の夏の世界がモンスーンのもたらすスコールですっかり洗われ、眼にいたいような緑が木々に戻った頃の七月十五日に新年度がスタートし、湿気を伴う暑さから徐々に解放されていく九月三十日までが第一学期。十月一日からの二週間の秋期休暇の後、日本の晩秋のよう

な気候の十二月二十四日までが第二学期。一月七日迄のクリスマス休暇をへて、三月の初旬までが第三学期となります。学部の場合、デリー大学本部より送られて来る試験問題による進級試験・卒業試験の準備期間が一カ月程あり、すべての試験が四月末頃までに終了し、二カ月程の夏休みにはいる、という次第です。

学部は三年制で、大別しますと二つのコースがあります。一つは、B.A.パス・コース(B.A. Pass Course)と呼ばれ、いくつかの組合せオプションはありますが、歴史・経済・哲学・英文

学などの四科目を併行して浅く広く学ぶコースです。もう一つが、経済・歴史・哲学・英文学・サンスクリット文学など、入学時選択する一科目を専修するオナーズ・コース (Honours Course) というものです。何れも、年度末の論述試験の結果で進級・卒業が決められるというものでした。採点も厳しく、Aクラスに相当するファースト・デイヴィションが六十点以上。合格点は、四十点。しかし、通算成績の平均が四十九点以下のサード・デイヴィジョンでは就職にも影響を及ぼし、MA コースへの入学も、成績上位者から定員数採るため、難しくなっています。

現在では、新カリキュラムが導入されているようですが、ここで私の入学当時の歴史の専修コースの内容をご紹介します。まず、一年次にその年度にクリアーしなければ進級できない、というメイン科目として、「インド古代史」と「イ

ギリス近代史」の二科目。そして、卒業までに合格すればよい、という補足科目 (Subsidiary Subject) として、必修の「英語」と、「倫理学」と「ヒンディー語」の何れかの二科目がありました。ちなみに、この「英語」の試験ではジョージ・エリオットの『サイラスマナー』とバーナード・ショーの『戦争と人間』の二冊のテキストに付いて設問と文法が問われたのですが、上級生から「落第すると進級できない」と脅かされたのを記憶しています。

また、「ヒンディー語」は、南インド出身者や、マニプールやナーガランドなど東北辺境州地域出身者にとって、彼らの言語がヒンディー語と全く異質なものだけに、そして、彼らのヒンディー語に象徴される支配的分化への反感からか、ほとんど受講する者はなく、多民族国家インドの抱える問題の一端が感じられました。

二年次には、メイン科目として「インド中世

史」の他、「近代極東史」と「アメリカ史」の何れかと、補足科目として「経済学」関係の二科目か「社会学」関係の二科目の選択がありました。そして、三年次には、「インド現代史」、フランス革命以後の「ヨーロッパ史」、「世界の憲法」という科目の他、三年間に履修した全ての分野から設定された三十の設問から選択した一問を三時間論述する、という「エッセイ」という試験をクリアせねばなりませんでした。

講義は、50分間単位で行われ、月曜から土曜日まで、九時頃から始まる第一限から昼食をはさんでの午後の第四限位までに集中して行われ、キャンパス内の寮に住む学生に対しては、特に講義への出席が厳しくチェックされたのを覚えています。

そして、二週間に一度の間隔で、それぞれのメイン科目にテュートリアル (tutorial) がありました。これは、五〜六人単位のグループ指導



で、講義で指摘されたテーマに付いて書いたレポートのチェックを受け、デイスカッションを行う、というものです。

講義にせよ、テュートリアルにせよ、入学当初の私には、全くチンプンカンプン。クラスメートたちは、まるで速記をしているかのように手を動かしノートをとっている。しかし、私は、書けたポイントが、ほんの二―三行という有様。ぼんやりとつかんだポイントを頼りに、指定されたテキストの相応部分を探す、という毎日が続きました。今でも、当時を思い出すと背筋が寒くなります。

しかし、私にとって幸運だったことは、日本の果たした急激な戦後復興への評価のためか、多くの先生方が日本人に大変好意的であったことです。故ラージパール校長は、私の英語力のなさを大変心配し、英語担当でカレッジ付属のチャペルの司祭でもあったイギリス人のヒスコ

ック先生との週一回、一年間の特別授業をアレンジしてくれたのです。レポート用紙三枚くらいのエッセイを書いてゆき、それを添削してもらった後、二十分くらいの世間話をする、というものでしたが、「娯楽小説でもいいから、内容の簡単なものを多読しなさい」とか、「一日十時間くらい英語を読むつもりで、がんばりなさい」とか、貴重な助言、励ましを得ることが出来ました。「英国史」担当のデイダール・シン先生は、定期的に試験準備のチェックをしてくれたのみならず、進級試験の直前に、わざわざ模擬試験をやって下さり、三時間に五問回答するというデリー大学の論述試験がどのようなかを体験するチャンスを与えてくれました。

インド人の抱いていた「日本」という国のイメージに、私は護られていた。当時を振り返る度に、そんな気持ちを抱きます。